

水の哲学

ヴィクトル・ユゴー

「パリは地下にもうひとつのパリ、
下水道のパリを持っている」

フランスの国民的作家であるヴィクトル・ユゴー（1802-1885）は何度も映画やミュージカルになっている長編小説『レ・ミゼラブル』の作者として有名だ。政治的には共和主義者として名を馳せ、1845年に上院議員となり、1851年にナポレオン3世のクーデターに抵抗して19年間に及ぶ亡命生活を送った。帝政崩壊後、民衆の喝采を浴びてパリに戻り、83歳で死去したときは盛大な国葬が行われた。

貧しさがもたらす罪

日本では『ああ、無情』というタイトルで知られている『レ・ミゼラブル』は20年以上の月日をかけてユゴーが60歳になった1862年に完成した。

主人公のジャン・バルジャンは貧しい妹の子供たちのためにパンを盗み、19年間もの徒囚生活を強いられる。刑期を終えて釈放されたものの、前科者として仕事にも就けず途方に促されていた。そんなとき司祭のミリエルに出会って思いがけず温かいもてなしを受ける。

ところが誘惑に負けたジャンは銀食器を盗み、ふたたび逮捕されて司祭のもとに連れ戻される。そのとき司祭は彼を非難するどころか銀食器は贈

ったものだと警官に説明し、さらに高価な燭台を与えようとする。

こうした司祭の姿にジャンは驚愕し、貧しさや差別に押しつぶされることなく司祭のように慈悲深く生きていくことを決心する。文中の「海よりも偉大な光景がある、それは天だ。天よりも偉大な光景がある、それは良心だ」という言葉をみずから体現するように。

ユゴーはこの作品を書くにあたって刑務所、工場、スラム街などを綿密に取材した。彼の主題のひとつが貧困による悲劇の追究にあったことは「この世に貧しさがある限り、この本の意味は失われない」という言葉からも如実に察することができる。



圧制に対する民衆蜂起

歴史的にみると『レ・ミゼラブル』はナポレオン1世による帝政の崩壊過程から王政復古を経て第2共和制の初期まで描いている。執筆にあたってパリの下町の貧しい人々の生活を描いたウージェヌ・シューの新聞小説『パリの秘密』の影響を受けたといわれている。

第2共和制は1848年のいわゆる2月革命を起爆剤として始まったものの、共和制右派は急激に台頭する労働者を弾圧し、同年6月に激的な市街戦に発展する。このときのユゴー自身の体験が『レ・ミゼラブル』の民衆蜂起の描写に色濃く反映されている。

表題の「パリは地下にもうひとつのパリ、下水道のパリを持っている」という言葉は『レ・ミゼラブル』の第5部に出てくる。ジャン・バルジャンが養女コデットの恋人で市街戦で負傷した革命家マリウスを抱えてセヌ川右岸にある中央市場のマンホールから下水道へ逃げ込むというクライマックスのシーンだ。ここでユゴーはパリの下水道について延々と語っている。

地下都市が物語るドラマ

ユゴーはパリの下水道を「そこには街路があり、四辻があり、広場があり、袋小路があり、大



通りがあり、泥水の往来があり、ないのは人の姿だけである」と表現している。それほど下水道は古代ローマ文明を継承したという文化都市パリを代表する一種の名物だった。いまでもエッフェル塔近くのセヌ川左岸の橋のほとりに下水道博物館があるそうだ。

下水道に代表されるようにパリにはもうひとつの地下都市の顔がある。ユゴーが「地中に住む触角が千本もある暗黒の腔腸動物」と表現した下水道網に加え、地下鉄、牢獄、運河、河川、泉、そしてカタコンブという巨大な地下墓場が広がっている。映画やミュージカルで評判になったガストン・ルルーのスリラー小説『オペラ座の怪人』の謎の怪人も地下に住んでいた。

地下都市はいわば表層の文明都市と対称的な関係にある。そこには華やかな舞台の裏側で繰り広げられる暗く生々しい虚飾を剥ぎ取った人間ドラマが存在している。民衆蜂起に加勢して警官隊に追われたジャン・バルジャンたちが下水道へ逃げ込んだのはその象徴だ。

文化都市パリの深層を白日のもとにさらした『レ・ミゼラブル』はひとつの時代の虚像と実像を描写した貴重なルポルタージュとなっている。それを支えているのは不条理な貧富の格差に異議を唱えるユゴー自身の熱烈なヒューマニズムにはかならない。

贖罪の十字架を背負ったジャン・バルジャンの自己回復の物語は腐乱した都市文明の熾烈な自己回復の物語と読み解くこともできる。

(高倉)